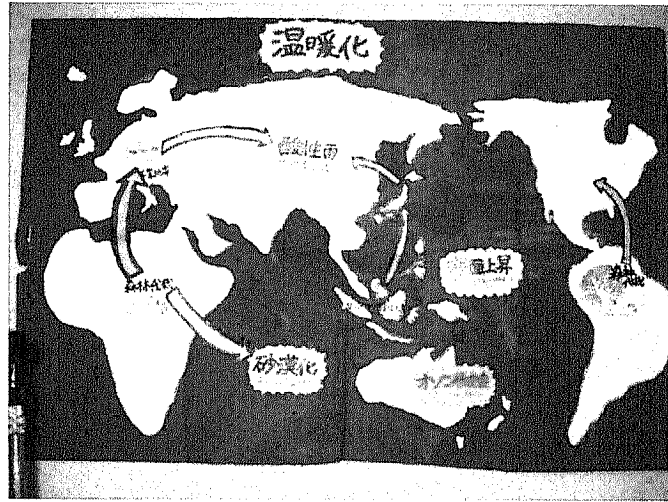


平成15年度（第9回）

高校生国際協力実体験プログラム報告書



平成16年3月

独立行政法人国際協力機構
中部国際センター（JICA 中部）

JICA LIBRARY



1209166 [6]



中部セ
J R
03-01

02/28/2012 10:10:10 AM



1209166 [6]



序文

この報告書は、2003年8月25日から27日（2泊3日）にかけて、JICA 中部で実施した「高校生国際協力実体験プログラム」の内容についてまとめたものです。

「高校生国際協力実体験プログラム」とは、国際協力の模擬体験や海外からの研修員との交流等を通じ、知的好奇心と感受性豊かな高校生たちに国際協力について考えてもらうためのものです。国際協力活動を通じて得たノウハウ及び人材リソースを活用し、学校現場における国際理解教育・開発教育に役立てることを目的に行っております。

本プログラムでは、世界の貧困問題を考える上での切り口として、教育、エイズ、環境、ジェンダーなどの課題を取り上げました。それらは相互に複雑に絡み合い、先進国日本の問題とも密接に関係した課題です。決して「正解」と呼べる解答のない、こうした課題を調べ、自らの身を置き、「学びあい」をし、自分がすべきことを考えました。高校生は時には驚くような柔軟な発想で考え、問いかけます。生徒、教師、JICAスタッフ一体となったこのプログラムを通じ、参加者それぞれに新たな「気づき」があったのではないのでしょうか。この報告書が、各地で国際理解教育・開発教育を実践されている方々のご参考になれば幸いです。

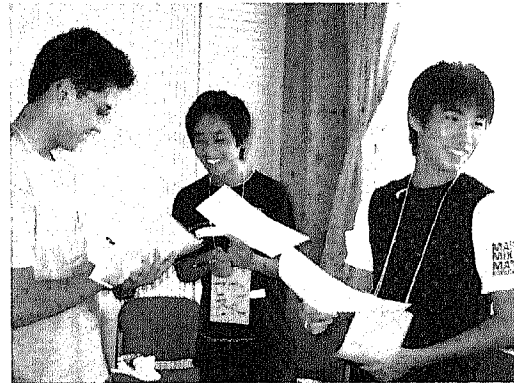
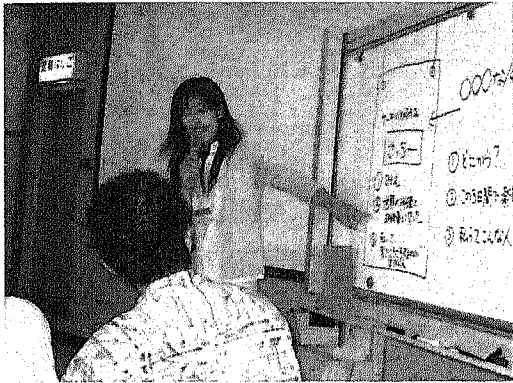
最後に、引率を引き受けて頂いた先生、そして快く送り出していただいたご家族の方々に御礼を申し上げますと同時に、今後とも JICA の国際理解教育・開発教育支援事業に一層のご理解、ご協力をいただきますようお願い申し上げます。

2004年3月

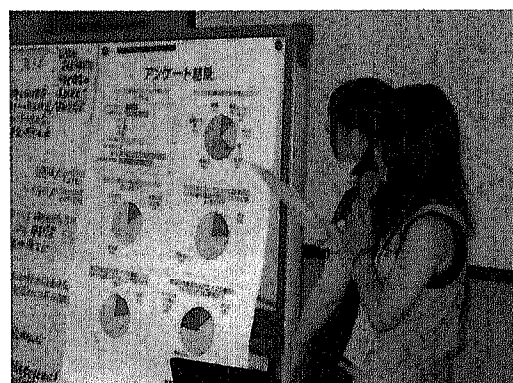
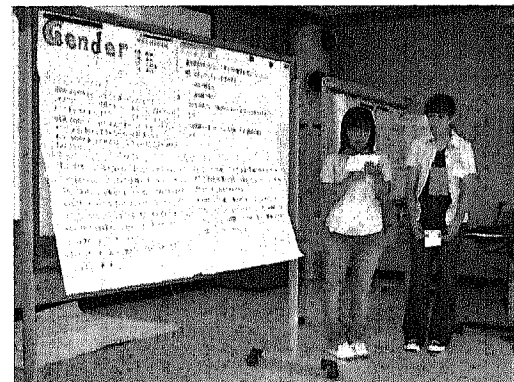
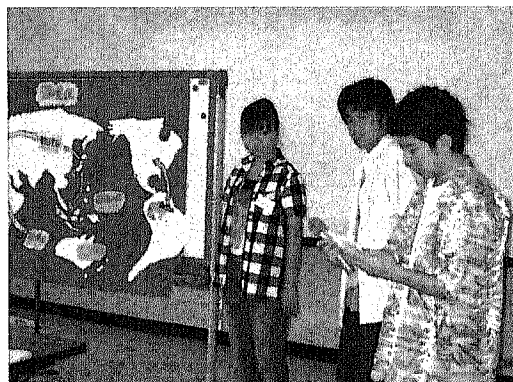
独立行政法人国際協力機構
中部国際センター（JICA 中部）
所長 荻原 久義

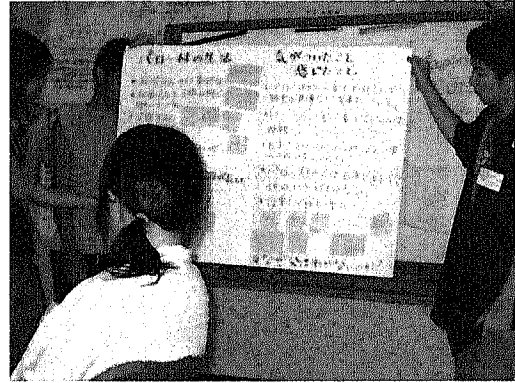
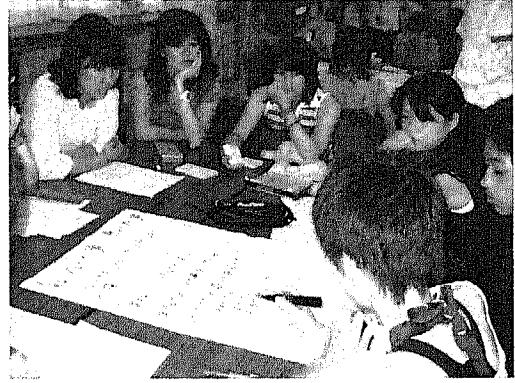
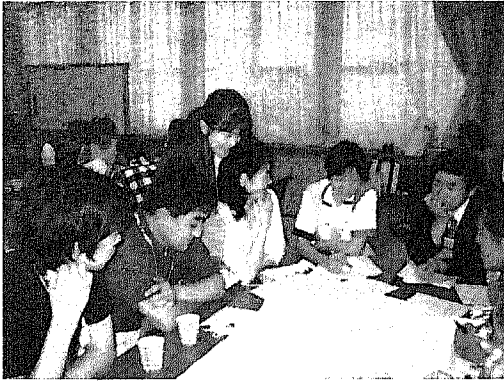
平成15年度（第9回）高校生国際協力実体験プログラム写真集

【アイスブレーキング】

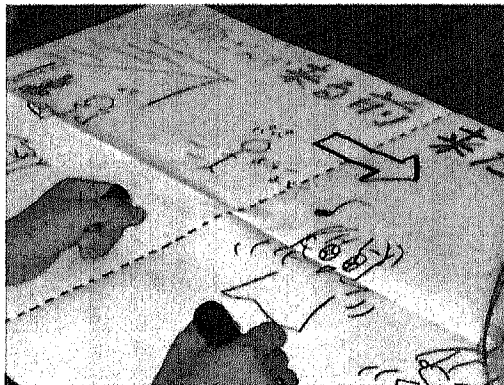
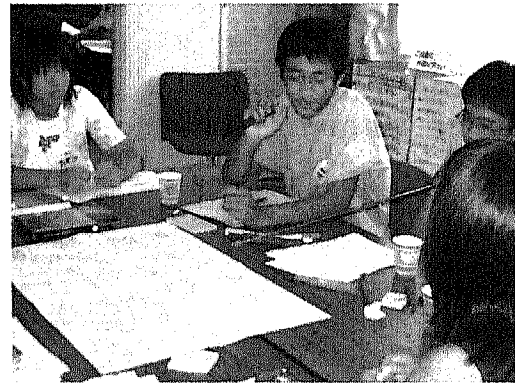
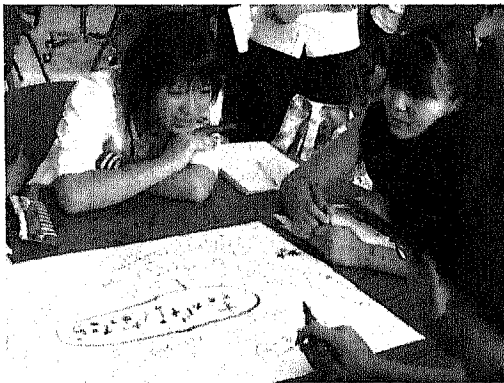


【事前学習発表会】



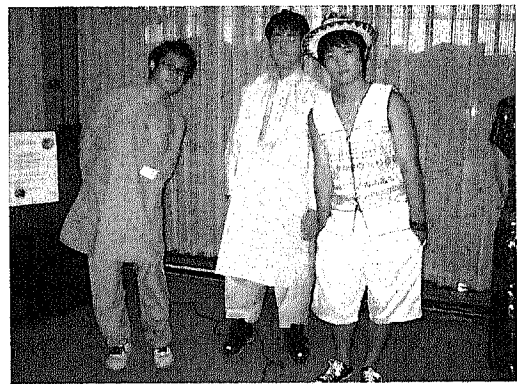


【ケーススタディの発表】

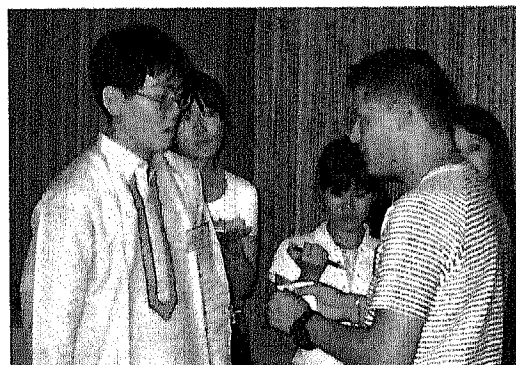
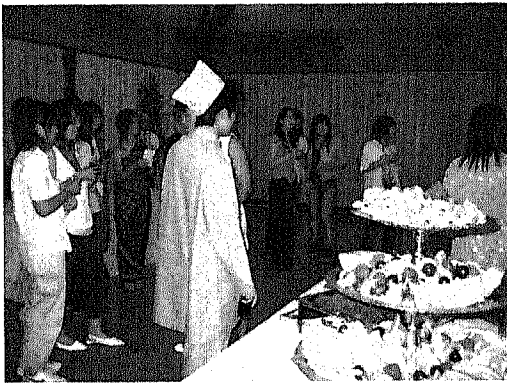


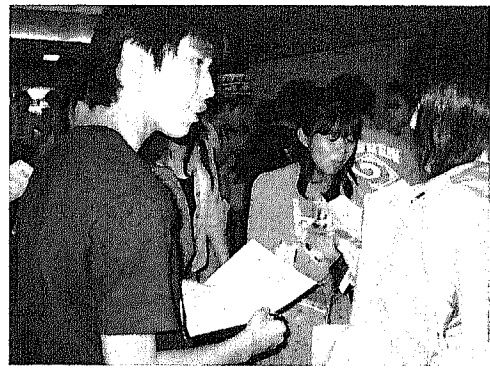
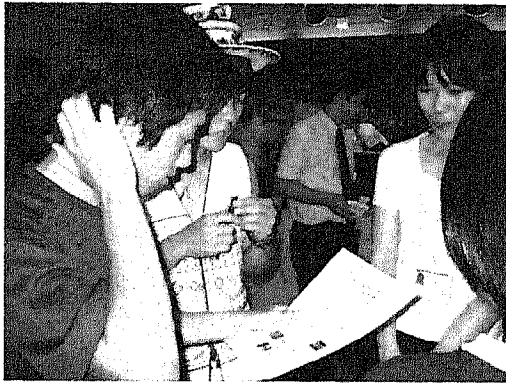


【民族衣装の試着】



【研修員との交流食事会・ワールドビンゴ】



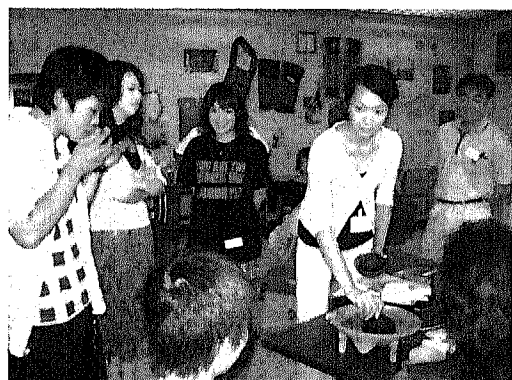
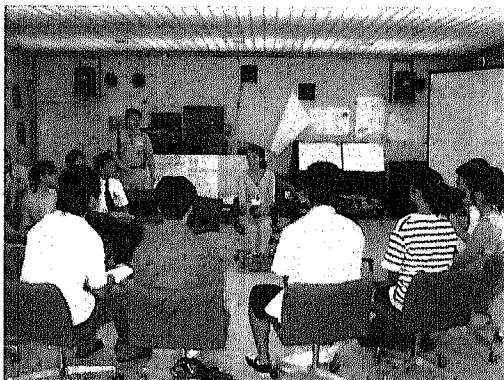


【国際協力に携わる人と話そう】



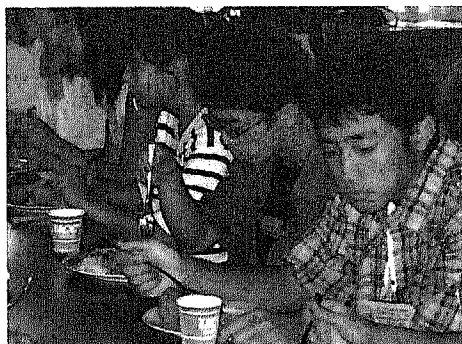
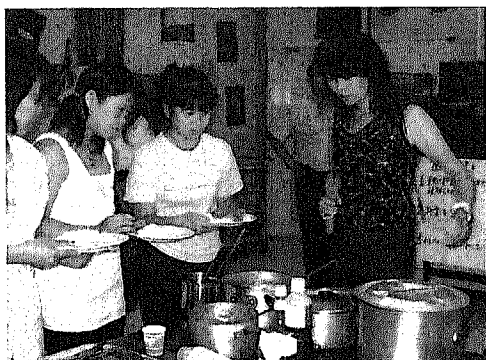
杉山 光男氏 (JICA 中部)

龍田 成人氏 (ICAN)

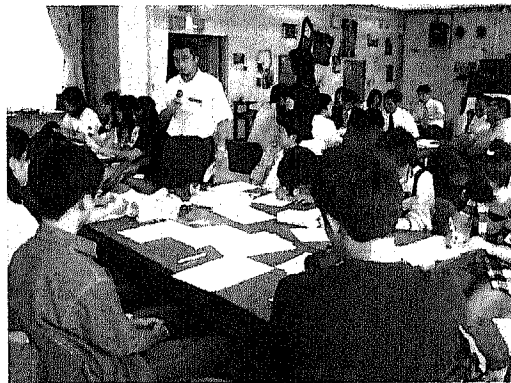
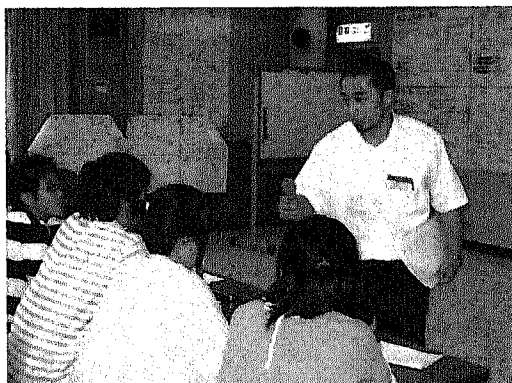


江口 由希子氏 (青年海外協力隊 OG)

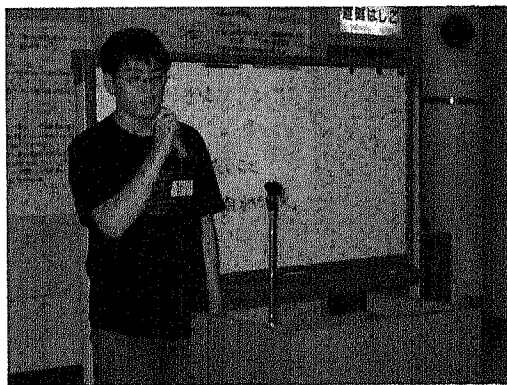
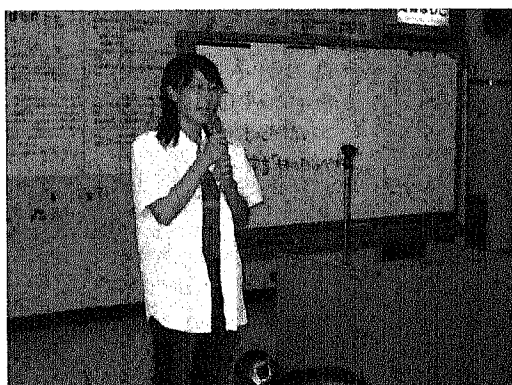
【世界の食事を体験しよう】



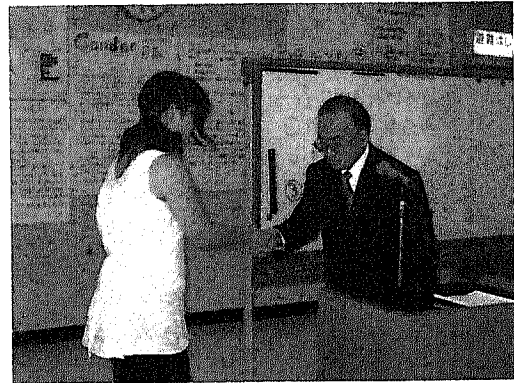
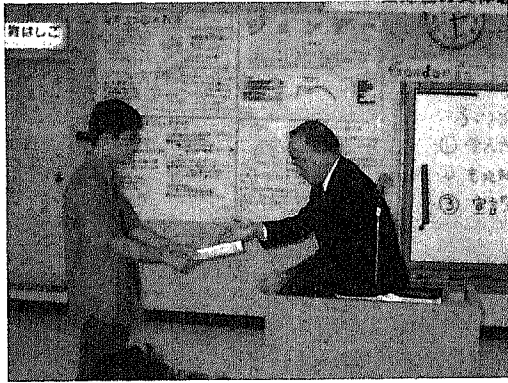
【まとめの会】



～私の宣言～



～修了証書授与～



目 次

序文

写真集

1. プログラム概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
2. 各プログラムの詳細・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

付属資料

- 1 平成 15 年度高校生国際協力実体験プログラム参加者名簿・・・・・・・・15
- 2 研修員及び無償留学生名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
- 3 アイスブレイキング企画書・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
- 4 ケーススタディ配布資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
- 5 研修員との交流食事会タイム・スケジュール・・・・・・・・32
- 6 研修員との交流食事会ワールドビンゴルール・・・・・・・・35
- 7 「世界の食事を体験しよう（ブラジル）」パワーポイント資料・・・・36
- 8 プログラム参加者（生徒及び教師）のレポート・・・・・・・・39
- 9 アンケート用紙・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・84
- 10 アンケート集計結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
- 11 掲載記事・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・105

1 プログラム概要

(1) プログラム名
平成15年度（第9回）高校生国際協力実体験プログラム

(2) 実施期間
平成15年8月25日（月）から8月27日（水） 2泊3日

(3) 実施の背景・目的

①背景

平成14年度より小中学校において、また、平成15年度より高等学校において総合学習が導入され、国際理解教育・開発教育への関心が高まっている。そうしたニーズに応えるため、当センターにおいては国際理解教育・開発教育支援を一層強化しており、生徒、学校、自治体、NGO等を対象にさまざまなプログラムを行っている。

②目的

本プログラムは、国際理解教育・開発教育支援の一環として、JICAの有する独自のリソースを活用し、中部・北陸の高校生を対象に、以下の目的で2泊3日の合宿セミナーを行うものである。

- ・世界には多種多様な文化・価値観が存在することを知る。
- ・開発途上国の現状と課題とその構造について理解を深める。
- ・国際協力の必要性和やり甲斐と楽しさを知る。
- ・国際協力への自身の関わり方を考え、行動につなげるヒントを得る。

(4) 対象者

①定員

中部・北陸地域7県から、原則一県一校の参加
(各校生徒4名及び引率教師1名)
本年度は合計8校、40名が参加

②応募資格要件

- ア 学校において開発教育に積極的に取り組んでいる教師とその生徒
- イ 研修の全日程に参加可能であること
- ウ 健康上、参加に支障のないこと
- エ 学校長より研修参加の許可が得られること
- オ 保護者より研修参加への同意が得られること（生徒のみ）

(5) プログラムの日程

日付	時間割	プログラム内容
8月25日 (月)	12:30～13:00	受付・チェックイン
	13:15～13:25	開講式・所長挨拶
	13:25～13:40	プログラム説明及びオリエンテーション
	13:40～14:40	自己紹介、アイスブレイキング
	14:40～14:55	休憩・発表準備
	14:55～16:45	調べてきたこと発表会、コメント、質疑応答
	16:45～16:55	休憩
	16:55～17:55	グループ分け、ケーススタディ
	18:00～19:00	夕食（各自）
	19:00～21:00	映画鑑賞
8月26日 (火)	9:30～12:00	ケーススタディ続き
	12:00～13:00	昼食（各自）
	13:00～15:20	ケーススタディ発表、コメント、ふりかえり
	15:20～15:30	休憩
	15:30～16:30	JICA事業紹介、国際協力クイズ
	16:30～17:00	民族衣装着付・休憩
	17:00～18:30	研修員との交流食事会
	18:30～ 18:50～19:30	自由時間（生徒） 先生方とJICA職員の懇談会（教師）
8月27日 (水)	9:30～11:00	国際協力に携わる人と話そう
	11:00～11:15	休憩
	11:15～12:40	世界の食事を体験しよう（ブラジル）
	12:40～14:20	まとめの会
	14:20～14:30	修了証書授与

(6) プログラム実施体制

本プログラムは国際協力事業団（JICA）中部国際センター（CBIC）が、以下の関係団体及び個人の協力を受けて実施した（敬称略）。

- ・国際協力事業団（JICA）中部国際センター（CBIC）
 - 所 長 荻原久義
 - 業務課長 興柁康一郎
 - 業務課長代理 三浦喜美男
 - 業務課 吉田ひとみ、秋山慎太郎、興津圭一、磯貝白日、池原いつか、高野晋太郎、渡邊由希子（総務課）
 - 国際協力推進員 秋田のぶ子、藤原久道、池田幸代、古田敦子、甲斐尚子、近藤美紀、石田暁子
 - 国内協力員 安藤康友、江口由希子、望月徳彦
 - 派遣職員 後藤麻水、浦口美之
 - インターン 平野友視、佐々木紘子、伊藤ありな
- ・(特) アジア日本相互交流センター 龍田 成人
- ・日系青年社会ボランティア OG（前国内協力員） 野田 典江
- ・国際協力 NGO 地球市民の会かながわ/TPAK 伊吾田 善行（タイ山岳民族資料貸出）

(7) プログラムの担当及び概要

[1日目]

- ①「自己紹介、アイスブレイキング」
 - 司会進行：池田幸代三重県国際協力推進員
 - 内容：生徒の緊張を解きほぐすもの、その後のケーススタディにつなげるため、グループ作業を伴い、かつ想像力を働かせる内容のものを行う（国際理解教育に関するゲーム等）。
- ②「調べてきたこと発表会」
 - 司会進行：磯貝白日職員
 - 内容：各校の事前学習の内容について、発表する。
- ③「ケーススタディ」
 - 司会進行：甲斐尚子静岡県国際協力推進員
 - 目的：事例の検討を通じて開発途上国の現状と課題とその構造について理解を深める。また、国際協力の必要性和やり甲斐と楽しさを知る。
 - 内容：タイ山岳民族支援のための協力隊員派遣を事例とし、教育、エイズ、環境、ジェンダー等の問題及びその構造について考える。タイ山岳民族の生活・文化に関するビデオ上映（10分）と写真・資料展示を行う。

④「映画鑑賞」

司会進行：興津圭一職員

内容：フィリピン国ケソン市にあるゴミ処分場近くに住む人々の生活を撮ったドキュメンタリー映画「神の子たち」（四ノ宮浩監督）を鑑賞する。

[2日目]

⑤「ケーススタディ続き」「ケーススタディ発表、コメント、ふりかえり」

司会進行：甲斐尚子静岡県国際協力推進員

⑥「JICA 事業紹介、国際協力クイズ」

JICA 事業紹介：高野晋太郎職員

国際協力クイズ：藤原久道名古屋国際協力推進員、池原いつか職員

内容：JICA 職員から JICA の事業説明を聞き、事業内容を紹介したビデオをみる。また、国際協力クイズを行い、正解が多いチームに民族衣装を着用して交流食事会に参加してもらう。

⑦「研修員との交流食事会」

司会進行：秋田のぶ子愛知県国際協力推進員、安藤康友国内協力員
秋山慎太郎職員

参加者：研修員30名

内容：研修員と食事をしながら歓談する。ゲーム（ワールドビンゴゲーム）を通じ、生徒と研修員の交流を図る。また、学校ごとに学校の紹介を英語でしてもらう。

⑧「先生方と JICA 職員との懇談会」

担当：興梶課長、三浦代理、興津・磯貝職員

内容：それぞれの学校における開発教育（国際理解教育）の取組状況、今後の予定、課題、JICA への要望等に関し、意見交換する。

[3日目]

⑨「国際協力に携わる人と話そう」

NGO 関係者 (ICAN) 龍田 成人

青年海外協力隊 OG/国内協力員 江口 由希子

JICA 中部国際センター 総務課長 杉山 光男

⑩「世界の食事を体験しよう（ブラジル）」

司会進行：古田敦子岐阜県国際協力推進員、藤原久道名古屋国際協力推進員、池田幸代三重県国際協力推進員、野田典江日系青年ボランティア OG

目的：途上国の食事を通じてその国の文化の一端に触れる。

内容：途上国の料理について、現地の事情も交えて紹介してもらい、その後実際に食べてみる。「国際協力に携わる人と話そう」の講師や推進員、

職員等も参加し、交流を深める。

⑪「まとめの会」

司会進行：JICA 中部国際センター業務課 興津 圭一

目的：2日間の体験を振り返り、国際協力への今後の自身の関わりについて考える。

内容：グループ毎に3日間の経験を通じた感想や、国際協力に対する自分の思いを自由に話し合い、紙にまとめる。その後、グループ毎に発表する。

⑫「修了証書授与」

修了証書授与：JICA 中部国際センター 興梶 康一郎業務課長

2. 各プログラムの詳細

① 事前学習の設定

ねらい： 国際協力の課題について調べ整理することを通じ、世界の現況を大まかに理解する。

内 容： 学校毎に以下の課題について模造紙（B 紙）2枚以内にまとめ、事前に JICA 中部国際センター宛に送付する（様式は自由。必要に応じて図やイラスト等の使用も可）。自主的なグループワークを行うための練習としての位置づけもあるため、教師の関与は最小限とするよう依頼する。選択するテーマが重なる場合は適宜調整する。

【課題：開発途上国が抱える問題の調査】

多くの開発途上国が抱える問題である、教育、エイズ、環境、ジェンダー（社会的性差）のうち、1つを選び（各校で1つ）、以下について調べてきてください。調査の方法、項目、まとめ方等は自由です。プログラムの中で10分程度の発表をしていただきます。

- 1) 問題の状況を簡単に調べてください。
- 2) その問題の解決のためにはどうすればよいか、自分たちが思うことを自由に話し合い、結果をまとめてください。
- 3) 家庭、学校、地域など、あなたの身近でも似たような問題があるか・ないか、自分たちが思うことを自由に話し合ってください。

② 異文化理解ワークショップ

ねらい： 生徒の緊張を解きほぐし、その後のケーススタディにつなげる。

内 容：

1) 名札作成

①（形容詞）な（呼んでほしい名前） ②どこから来たか？ ③三日間何を一番楽しみにしているのか？ ④私ってこんな人
用紙で作ったフォルダーに、①～④を書き、首から掛けて名札完成。

2) 自己紹介

できるだけたくさんの人と名札に書いた4つの内容を紹介しあう。5人目まで書くことができるシートを配布し、それぞれイスから立って自由に動く。（シートには、その人の特徴を書く欄も用意）

3) 知り合った人紹介

マイクを渡された人は、どんな人と知り合いになったのか、印象に残っている人を一人発表する。そして、そのマイクを次の誰かを選んで渡し、順次紹介。

4) 部屋の四隅

① 今日何時台に家を出たか？ ②血液型は？ ③行ってみたい国

は？ ④ どうしてこのプログラムに参加したのか？

5) 金魚のふん (隣の隣)

8人5グループになって、金魚のふんゲーム。はじめの人が「私は〇〇です。」と言ったら隣の人が「私は〇〇さんの隣の△△です」と次々に増やしていく。まずは、名前だけ、次に形容詞もつけて行った。

③ 調べてきたこと発表会、コメント

ねらい： 各校の事前学習の内容について、参加者間でその情報の共有を図る。
国際問題について知識・理解を深める。

内 容： 各校の事前学習の内容について、発表する。

1) 環 境 (石川県立金沢辰巳丘高校、愛知県立愛知工業高校)

- ・ 地球温暖化、酸性雨、オゾン層破壊について、経済と環境の面から、先進国と途上国の立場で考えて、発表した。
- ・ 森林破壊・水不足・動植物の危機・土地の劣化(砂漠化)などの問題を「子供への影響」をテーマに、解決策を考え発表した。

2) AIDS (岐阜県立桜太農林高校、愛知県立東海商業高校)

- ・ エイズについて調べたり、校内で行ったアンケートをもとに、問題点を考えたりし、そこから解決策を導き、発表した。

3) ジェンダー (私立大成高校、三重県立津高校)

- ・ 少子化、セクシャルハラスメント、夫婦別姓などのジェンダーにかかわる社会的な問題や現在に動きにについて、調べて発表した。

4) 教育 (静岡県立長泉高校、私立富山国際大学付属高校)

- ・ 「識字率」に注目して途上国の教育について調べ発表した。
- ・ 奴隷をなくすための教育の役割について、パワーポイントを使用して、英語で発表した。

④ ケーススタディ

ねらい： 事例の検討を通じて開発途上国の現状と課題とその構造について理解を深める。また、国際協力の必要性和やり甲斐と楽しさを知る。

内 容： タイ山岳民族支援のための協力隊員の派遣を事例とし、教育、エイズ、環境、ジェンダー等の問題及びその構造について考える。

1) 「山岳民族のこどもは学校に行っているの？」

2) 「伝統的な焼畑農業は悪いこと？」

3) 「どうして出稼ぎしなければいけないの？」

「貧しさを乗り越える」

という資料をもとに、考えを出し合う。

考える際のポイント

- 山岳民族の生活と自分達の生活を比較してみる。
- 山岳民族の教育についての問題点と解決策を出す。

- 森がなくなった場合を想定して、起こりうることを挙げる
- それが起こらないようにするために今日から私達ができることを挙げる
- 高野さんが来る前と来た後の山岳民族の生活変化を考える

<全体でのまとめ>

主に出た意見

- ・ 高野さんのような存在は必要
- ・ 改めて身近でできることに気づいた
- ・ 自分の行動を振り返り、自分のできることをしたい
- ・ 色々な意見を聞くことができてよかった
- ・ お金も必要だが、協力することの大切さを知った
- ・ 聞くこと、まとめるといった様々なことができたのではないか
- ・ 自分で考え、意見を持って、みんなで協力するという参加型は答えが出しにくい問題に効果的だ
- ・ 資料から十分に分からない点があったので、実際はどうなのかという疑問が残った

職員の方、ファシリテーターからのコメント

- ・ 世界にはたくさんの価値観がある。それを押し付けてはいけない。
- ・ こうしたケーススタディを通して何かに気づいて進んでほしい。

⑤ JICA 紹介・国際協力クイズ

ねらい： ODA 実施機関としての JICA の役割を知る。

内 容： JICA 職員から事業説明を聞き、事業内容を紹介したビデオを見ることで理解を深める。地域の窓口としての推進員の役割についても紹介する。世界の文化や JICA の活動などについてのクイズ。各校の生徒が混ざって 4 人で 1 グループをつくった。3 択問題で、インターンが民族衣装を着て 1, 2, 3 のカードを持って立つ。1, 2, 3 位に入賞したグループは民族衣装を着る。

⑥ 研修員との交流食事会

ねらい： 各国研修員との交流を図る。

内 容：

- 1) 食事をしながら歓談。
- 2) ワールドビンゴ
- 3) 高校紹介（自分の学校を英語で紹介）

⑦ 国際協力に携わる人と話そう

ねらい： 国際協力経験を語り、国際協力の楽しみを伝える。

内 容： グループに分かれて講師の話の聞き、質疑応答を行う。

杉山 光男（JICA 職員：ブラジル、ボリビアに赴任）

(1) 国際協力に携わる仕事に就こうと思った動機

- ・ 高校時代に漠然と大農場の農場主になりたいという夢があった。

- ・ ブラジルに興味を抱き、大学でポルトガル語を学ぶ。
→大学2年時に、2年間休学してブラジルを旅する
↓ ↓ ↓
- ・ ブラジルの移住者の人々と触れ合う⇒関係する仕事に就きたい

(2) この仕事から感じたこと

- ・ 援助を一方向的にしても効果がない。
→途上国自身が問題を改善したいと思わなければいけない
- ・ 日本の価値観にのっとって援助をするのではなく、コミュニケーションを通じて現地のニーズに合った協力を展開していくことが大切。

(3) 実体験プログラムへ参加している生徒へのメッセージ

- ・ 国際協力は様々な協力方法がある。
- ・ 協力してあげているという高飛車な態度を持つべきではない。
- ・ 地域であったり、学校であったりと身近な所で悩んでいる人がいたら、そういう面から意識的に関わり合っていくことが大切。
- ・ 自分の良さを伸ばす努力が必要
- ・ 自分の力でできることは、どんなことがあるのだろうか意識を持つことが大切。

⇒国際協力は身近なものであり、身近なことから始めることが重要だ

江口 由希子 (国内協力員：トンガで活動)

(1) トンガについて

トンガは太平洋にあり、ニュージーランドの斜め上に位置する国。4つの島々からなる。肥満が国民病であり、男女ともに太っている。日本では(特に女性)痩せることに努力し、‘スリムが一番’という考えが強いが、トンガでは自分の好きな食べ物をやめてまでダイエットをしたくないと思っている。また、「わたし怠け者なの。」と言うのが口癖。毎年「ダイエットコンテスト」があり、国の有名な行事。このコンテストのために30~40キロ痩せる人もいるが、極端だったり間違ったダイエット方法で痩せるため、コンテストが終わると結局すぐ戻ってしまうか、より一層体重が増えてしまうので問題。なぜトンガが肥満国になってしまったかと言うと、以前食糧不足になったときに、ニュージーランドからシピと言う羊のあばら肉を輸入したのが原因。シピはとてもカロリーが高く、ニュージーランド人は食べないがこの輸入をきっかけに、トンガ人はシピを気に入りたべる習慣がついてしまった。

(2) 青年海外協力隊としての活動

トンガの小学校で体育の先生として、正しい運動の仕方やダイエット方法など、肥満を減らすために子供たちにダイエットの正しい知識を身に付けさせることに従事した。大変だったことは、トンガには青年海外協力隊の前任者がいなかったこと。始めのうちは何をしていたら手探りだったが、約50校の学校をまわりながら少しずつダイエットを推進していき、肥満防止に力を注いだ。

(3)生徒へのメッセージ

自分の好きなこと、できることを磨くことが国際協力につながる！！

(4)「カバ」の試飲

コショウ科の植物の根を砕き、水に浸してつくったポリネシアの伝統的な飲み物を飲んでみる。

龍田 成人 (NPO アジア日本相互交流センター)

(1) パワーポイントによる団体紹介

- ・ ICAN の始まりと発展経緯
1993年ピナツボ被災民テントシティで「Good bye my friend」がきっかけ
インターネットが追い風に情報発信
- ・ 活動目的
アジア、特にフィリピンの人を中心に生活向上や、国際協力や理解を深める
- ・ 活動内容
フィリピン：医療支援（無料診断・学校改善プログラム・薬半額販売）
職業訓練（ワークショップ・作業組合による生産販売）
日本：国際理解教育 ファシリテーター育成
現地パヤタスの人々と思いを共にするために

⑧ 世界の食事体験

ねらい： 途上国の食事を通じてその国の文化の一端に触れる。

内 容：

- 1) ブラジルについての紹介
- 2) ブラジル料理の調理・試食

⑨ まとめの会

ねらい： 3日間の体験を振り返り、国際協力への今後の自身の関わりについて考える。

内 容： 3日間の体験を通じての感想や、国際協力に対する自分の思いを話し合い、紙にまとめる。「未来の自分への約束」として宣言する。

<個人の宣言>

- ・ 大人になっても世界には貧困で苦しんでいる人がいることを忘れず、小さなことから自分にやれることをやっていきたい。
- ・ 身近なことから始めたい。エアコンを28度に設定。割り箸を使わない。
- ・ 自分達が裕福なことが分かった。
- ・ 勉強が嫌だなんて言っている場合ではない。ユネスコの活動に関わり、自分から国際協力を広めたい。
- ・ モノや人を大切にしたいと思った。
- ・ いろいろな文化や価値観があり、押し付けてはいけないことを学んだ。もっと、他文化の人と交流したい。
- ・ 得意な分野や好きなことをして、仕事につながるようにしたい。

- お金だけでなく、技術協力という形もあることを知った。どんな人に対しても相手への配慮を忘れず、やさしい人間になりたい。
- 緒方貞子のような人間になる。
- もともと青年海外協力隊になりたくて、難しいことだと考えていたが、実際に活動している人の話を聞いて、自分のできることで協力すればいいことを知り、自信をもつことができた。何に対しても、ポジティブに取り組もうと思う。
- 看護師になり、日本の医療を他の国に教えたい。

